

# グローバルマインドを培う総合的な学習の時間の取組

## I. グローバル時代に求められる資質・能力

グローバル化に関しては、中央教育審議会答申（2005）の「新しい時代の義務教育を創造する」において、次のように述べられている。

「我が国が、変動の激しいこれからの時代において、今後とも国際的な競争力を持つ活力ある国家として、また世界に貢献する品格ある文化国家として発展するためには、国民一人一人が、そのような国家・社会の形成者として、それぞれの分野で存分に活躍することのできる基盤を義務教育を通じて培う必要がある」このことは、社会情勢の変化に応じて、国際社会で活躍できる人間を育成する必要性を謳ったものである。

このようにグローバル時代を生き抜く人間の育成が社会的に要請されている中で経済産業省（2010）は、以下のグローバル人材に必要な資質・能力を挙げている。

- ① 社会人基礎力（アクション・シンキング・チームワーク）
- ② 外国語でのコミュニケーション
- ③ 異文化理解・活用力

（産学人材育成パートナーシップ～グローバル人材育成委員会報告書より）

また、グローバル人材育成推進会議（2012）では、グローバル人材の定義について以下の項目を挙げている。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

（グローバル人材育成戦略～グローバル人材育成推進会議・審議まとめより）

以上のような経済産業省とグローバル人材育成推進会議の定義をみると、グローバル時代を生き抜く人間に必要な資質・能力はほぼ共通しており、国をあげてこのような資質・能力を培う方向性であることがわかる。

## II. グローバルマインドを培う総合的な学習の時間における実践

これまでに本校では総合的な学習の時間を活用して、上述したグローバル人材の要素Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを網羅した「グローバルマインドを培うためのカリキュラム」について協議を重ね、今年度実践した。

### 1 国際交流活動について

本校では、平成13年よりアメリカ合衆国ノースカロライナ州の Exploris Middle School、平成19年よりカリフォルニア州の Odyssey School、平成22年よりインドネシアの MENDOYO 第4中学校と国際交流活動を行ってきている。

毎年、これら3校から生徒数名が本校を訪れ、授業交流や文化交流、



ホームステイなどを行っている。また、Exploris Middle School が来校する際には Shinonome 国際ミーティング、MENDOYO 第4中学校が来校する際にはフラワーフェスティバルでのパレードを行い、特色ある国際交流を展開してきた。さらに、毎年8月には本校からも6～8名の生徒が Exploris Middle School や Odyssey School を訪問し、日米文化の共通点や相違点を学んできている。次の表1は、国際交流活動に関する主な年間スケジュールである。

表1 国際交流活動に関する主な年間スケジュール

時期	内容	備考
5月 第1週	<u>MENDOYO SMP4 来校 (2日間)</u> ・文化交流活動 ・フラワーフェスティバルパレード合同参加	生徒4名 教師5名 来校
5月 第3週	<u>Odyssey School 来校 (3日間)</u> ・通常授業への参加 ・意見交流会 ・ホームステイ体験	生徒8名 教師2名 来校
8月 第3週 ～ 第4週	<u>Odyssey School 訪問 (3日間)</u> ・通常授業への参加 ・ホームステイ体験 ・フィールドワーク*1 参加 <u>Exploris Middle School 訪問 (1週間)</u> ・通常授業への参加 ・文化紹介活動 ・ホームステイ体験	生徒8名 教師2名 訪問
3月 第3週	<u>Exploris Middle School 来校 (1週間)</u> ・通常授業への参加 ・文化紹介活動 ・Exploris の教師による授業 ・ホームステイ体験 ・Shinonome 国際ミーティング*2 開催	生徒8名 教師2名 来校

- \*1 「フィールドワーク」は、Odyssey School が取り入れている教育プログラムの一つである。生徒がグループごとに様々なミッションを協働で達成していく内容である。これまでサンフランシスコの町中でのミッションを行っている。
- \*2 「Shinonome 国際ミーティング」は広島県内の公立中学校も招待し、各校生徒会のメンバーがそれぞれの学校活動の取り組みを紹介する。お互いの紹介を通して自校の良さや他校の良さを感じることができる。

ここで特筆すべきことは、本校の国際交流活動は、学校間の交流やホームステイなどを通じた異文化理解にとどまらず、Shinonome 国際ミーティングのように国境を越えて、それぞれの立場や状況を踏まえながら、グローバルな問題を考えていく教育活動を取り入れていることである。ここでは、質の高い異文化理解だけでなく、国際社会における日本のスタンス、ひいては、日本人としてのアイデンティティーをも必要とする。

## 2 SMARTについて ～修学旅行を利用した取り組み

本校では、平成25年度より「東雲中学校 (Shinonome) の生徒は、自らの使命 (Mission) を自覚し、問題発見したことを現地で探究 (Research) し、その過程において見通しをもった行動 (Action) をとる修学旅行 (Tour) —SMART—」を行ってきている。これは、問題を発見し、その解決に向けて見通しをもち、仲間と協力してミッションを遂行していく力の育成を図った教育プログラムである。また、このS





MARTは、旅行の行程を予算や安全性に考慮しながら自分たちでデザインする。したがって、必然的にプロジェクトマネジメント能力も求められる。

例えば、野球部に所属するHくんが、部活動の際に手にするロジンバックの肌触りや臭いに関心を示したことから、人の体にやさしいロジンバックの開発をテーマとした。そして、紀州備長炭に着目し、仲間と協働して現地での取材をもとに新たなロジンバックの開発プランを作成するような一連の研究活動を行う。

ところで、先進的な教育を展開しているシンガポールの Temasek Junior College では、英語力や学力の育成だけでなく、リーダーシップ育成のための教育プログラムを実践している。本校においても国際交流活動に加え、グローバル社会のリーダー育成という視点をも重視する。したがって、プロジェクトマネジメント能力の育成が期待できるSMARTは、グローバルマインドを培ううえで重要な位置づけとなる。次の表2は、SMARTに関する教育プログラムである。

表2 SMARTに関する教育プログラム

時 期	内 容
第1学年 前 半	自分の興味・適性について Pre <b>Task Trip</b> (広島市近郊)
第1学年 後 半	Pre <b>Research Tour</b> に向けた 研究テーマ・内容・方法の作成及び行程の計画
第2学年 前 半	Pre <b>Research Tour</b> (呉市近郊, 昨年度は尾道市) 研究のまとめ・提案及び交流
第2学年 後 半	SMARTに向けた 研究テーマ・内容・方法の作成及び予備調査
第3学年 前 半	SMARTに向けた 研究の再考・行程の計画
SMART (7月)	<b>Task Trip</b> 京都近郊で行うミッションが朝発表され、それに向けて京都に向かいながら行程を計画し、ミッションを協働して遂行する
	<b>Research Tour</b> 紀伊半島を中心として各人の研究テーマを遂行できるように、協働して現地調査を行い、探究活動を展開する
第3学年 後 半	研究のまとめ・提案 研究の報告・交流



なお、個々人の研究に見通しをもたせ、研究の質をあげさせることを目的として、本校教員は、例えば、鈴木敏恵氏のプロジェクト学習など、年に数回の研修会を開催して、生徒への支援を充実させるように研鑽してきている。

### Ⅲ. グローバルマインドを培う総合的な学習の時間における実践の検証

#### 1 国際交流活動について

アンケート調査の結果（浜岡ほか，2011）から本校で実施する国際交流活動は，グローバルマインドを培う一助になっていると判断できる。

平成 26 年 3 月に実施した Exploris Middle School 来校後に，本校生徒に実施したアンケート調査の結果によると，「英語を話せるようになることは自分にとって必要である」と回答した生徒が約 8 割，「言葉に関係なく誰とでもコミュニケーションをとれるようになることは自分にとって必要である」と回答した生徒は約 9 割いた。これらのことから，本校の生徒は要素Ⅰである語学力・コミュニケーション力の必要性を強く感じながら学校生活を送り，多くの国際交流の活動を行っている様子がうかがえる。平成 26 年 8 月に Odyssey School と Exploris Middle School へ訪問した生徒へのインタビュー調査によると，「言葉に関係なく誰とでもコミュニケーションをとれるようになること」の重要性について，8 名全員が「とても重要である」と回答した。このことから，実体験によりコミュニケーションの重要性を痛感している様子がうかがえる。

また，平成 26 年 3 月に本校生徒に実施したアンケート調査の結果によると，「相手の国の文化や考え方をよく知ることは自分にとって必要である」，「日本の文化や考え方をよく知ることは自分にとって必要である」と回答した生徒は，ともに約 7 割いた。これらのことから，本校の生徒は国際交流活動を通して要素Ⅲである異文化に対する理解の必要性を感じている様子がうかがえる。平成 26 年 8 月に Odyssey School と Exploris Middle School へ訪問した生徒は，渡米の感想として次のように記している。



#### 〔Aさんの感想〕

私はこの渡米中に，アメリカの生徒は自分の意見を貫こうとする意志があることを自身の目で見てきました。日本の生徒は他の人と異なる意見や考えをもつことに消極的で，自分が正しいと思っていることもひかえて大多数の意見に流されてしまう傾向があると思います。しかし，今回お互いを認め合うという形は国や地域によって異なることがわかったので，日本の場合は信頼関係が存在すれば日本人として積極的に意見を出してもわかり合えるということを実感しました。

#### 〔Bさんの感想〕

私はホームステイを経験することで，アメリカの文化や習慣にふれることができました。まず，家で靴を脱がないことにも驚いたのですが，くしゃみをしたときに「Bless you」と言われました。これは「神のご加護を」と投げかけることによって相手と良好な関係を築こうという思いがあることを知りました。私が思ったことは，日本の習慣に慣れているけれど，それが決して1番良いとは限らず，アメリカの文化や習慣にふれて初めてその良さもわかると思いました。



AさんとBさんの感想から、渡米の経験が異文化に対する理解に加え、日本人としてのアイデンティティを強く意識する機会になったと解釈できる。実際にAさんは、平成26年10月に本校で実施した「渡米報告会」において、全校生徒に日本人としてのアイデンティティをもつことの重要性を主張する報告を行った。

## 2 SMARTについて ～修学旅行を利用した取り組み

今年度の全国学力・学習状況調査の生徒質問紙において、「総合的な学習の時間の授業で学習したことは、普段の生活や社会に出たときに役に立つと思いますか」という質問に対する結果は、次の表3のようになっている。

表3 「総合的な学習の時間の内容は社会で役立つか」(全国学力・学習状況調査)

	1 (当てはまる)	2(どちらかといえば、 当てはまる)	3(どちらかといえば、 当てはまらない)	4(当てはまらない)
本 校	34.6(30.4)	44.9(45.6)	14.1(15.2)	6.4(8.9)
全 国	23.1(22.6)	48.1(45.1)	20.7(22.6)	7.9(9.3)

※ 表の数値は百分率(%)であり、( )内の数値は昨年度の結果である。

また、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という質問に対する結果は、次の表4のようになっている。

表4 「総合的な学習の時間ではPDCAサイクルで活動しているか」(全国学力・学習状況調査)

	1 (当てはまる)	2(どちらかといえば、 当てはまる)	3(どちらかといえば、 当てはまらない)	4(当てはまらない)
本 校	47.4(38.0)	38.5(38.0)	11.5(16.5)	2.6(7.6)
全 国	16.2(15.3)	38.5(35.6)	31.4(32.7)	13.7(16.0)

※ 表の数値は百分率(%)であり、( )内の数値は昨年度の結果である。

以上の生徒質問紙の調査結果から、平成25年度から本校で実施しているSMARTの活動は、2年目となる今年度さらに充実度を増しながら、普段の生活や社会に出たときに役に立つという視点において、グローバルマインドを培う一助になっていると判断できる。

さらに、今年度のSMARTの活動後に、本校第3学年の生徒に実施したアンケート調査の結果によると、「自分の判断で行動する力に関する自信」に対して61%の生徒が肯定的な回答をした。また、「さまざまな考えを受け入れる柔軟性に関する自信」に対して62%の生徒が肯定的な回答をした。これらのことから、本校の生徒はSMARTの活動を通して、要素Ⅱであるチャレンジ精神や柔軟性にかかわる自信を高めていった様子が見えてくる。



#### IV. おわりに

グローバルマインドを培うために本校では、グローバル人材の要素Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのすべてを網羅したカリキュラムを実践した。このカリキュラムは、要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力や要素Ⅲ：異文化に対する理解の伸長を目指す「国際交流活動」と要素Ⅱ：チャレンジ精神や柔軟性の伸長を目指す「SMART」の2つの方向による実践である。

第一に、本校の国際交流活動は、生徒へのアンケート調査やインタビュー調査から、渡米した生徒の語学力に加えて、全校生徒におけるコミュニケーションへの意識において有用な実践であることを示した。第二に、本校におけるSMARTの活動は、全国学力・学習状況調査から全国平均の150%の割合(表3における「当てはまる」の回答比は1.49である)で、社会に出たときに有用な実践であることがわかった。また、生徒へのアンケート調査から、自分で判断して行動することや様々な考えを受け入れながら行動することに関する意識において有用な実践であることもわかった。



今後は、今年度有効性を示した総合的な学習の時間を活用した「グローバルマインドを培うカリキュラム」の枠組みをもとに、さらなる内容の充実をめざした実践を展開していきたい。具体的には、例えば、プロジェクト学習システムやICTの有効活用というような視点の導入を構想している。また、各教科等で日々行う授業と連携する視点から、すべての教育活動において子どもたちのグローバルマインドの伸長に寄与できるような実践を構想していきたい。これからも地域、日本、世界で積極的に挑戦し活躍できる人間を培うために本校の実践は継続され、発展していく。

#### 引用・参考文献

- グローバル人材育成推進会議：グローバル人材育成戦略(グローバル人材育成推進会議 審議まとめ), 2012.
- 浜岡恵子ほか：中学校における国際交流の在り方 -Exploris Middle School・Odyssey School・MENDOYO SMP4との交流を通して-, 広島大学学部附属協働研究紀要第40号, 59-64, 2011.
- 広島大学附属東雲中学校：社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発Ⅱ-大学と連携した研究開発システムの構築に向けて-, 平成25年度広島大学附属学校園研究推進委員会報告書, 33-38, 2014.
- 文部科学省：中学校学習指導要領, 2008.
- 産学人材育成パートナーシップ～グローバル人材育成委員会：報告書～産学官でグローバル人材の育成を～, 2010.
- 中央教育審議会答申：新しい時代の義務教育を創造する, 2005.